

2026年3月18日

第18回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 日本のスポーツを支える「縁の下の力持ち」を表彰

～ 受賞者決定のお知らせ ～

公益財団法人ヤマハ発動機スポーツ振興財団(YMFS)は、2025年度「第18回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」(後援:公益財団法人日本スポーツ協会、公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本パラスポーツ協会日本パラリンピック委員会)の受賞者を決定しました。

「ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」は、日本のスポーツを支える「縁の下の力持ち」の功績を称えるとともに、受賞者のさらなるチャレンジと活躍を期待・奨励する表彰制度です。受賞者の献身的な取り組みと大きな成果を刺激として、「挑戦する心」が広く、深く、社会やスポーツ界に浸透していくことを願って2008年度から実施しています。

「第18回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞」の受賞者は、以下の通りです。

第18回ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 受賞者 (敬称略)



やすだ きょうへい
安田 享平

1967年生 千葉県君津市出身

**ガイドランナーの第一人者として
競技力向上と、伴走文化の浸透・拡大を牽引**

ブラインドマラソン／ガイドランナー指導者
NPO法人 日本ブラインドマラソン協会 常務理事(強化委員長)
日本製鉄君津 陸上部監督/runweb 代表

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞

<https://www.ymfs.jp/project/culture/prize/>



※この件に関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。(担当:山川)

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞 概要

ヤマハ発動機スポーツ振興財団スポーツチャレンジ賞は、スポーツ界の「縁の下の力持ち」を表彰する制度です。スポーツ振興や社会の活性化につながる大きな成果に対し、献身的かつ情熱的な活動によってその実現を支えた人物・団体を表彰します。

YMFS は、大きな成果そのものと同様に、その実現を支えた活動やプロセスもまた称賛されるべき対象だと考えています。スポーツチャレンジ賞は、それぞれの分野・立場において、夢や高い目標に向かって積極果敢に挑戦し、縁の下から献身的な活動を続けた人物・団体に敬意を表するとともに、今後さらなる活躍への期待を込めてエールを送る表彰制度です。本賞を通じて共感や称賛の輪が広がり、人々の新たな行動を起こすきっかけになること、そして「挑戦する心」が社会に浸透していくことを願って実施しています。

対象	スポーツ振興や社会の活性化につながる大きな成果に対し、献身的な活動で縁の下から支えた人物・団体
選考要件	1. スポーツ振興や社会の活性化につながる大きな成果に対し、その実現に貢献・寄与した活動である 2. ロールモデルとして、他者や社会に対するより良い影響が期待できる 3. 今後、さらなる活動の発展や活躍が期待できる
賞金・副賞	賞金(個人)100万円/(団体)200万円、賞状、メダル、副賞

選考委員会 (敬称略/五十音順/2026年1月1日現在)

選考委員長	伊坂 忠夫	立命館大学 副学長、立命館大学 スポーツ健康科学部 教授
選考委員	内田 若希	九州大学大学院 人間環境学研究院 准教授
	片山 敬章	名古屋大学 総合保険体育科学センター 教授
	小島 智子	株式会社チアホリックス 代表取締役
	杉本 龍勇	法政大学 経済学部 教授
	瀬戸 邦弘	鳥取大学 教育支援・国際交流推進機構 准教授
	高橋 京子	フェリス女学院大学 グローバル教養学部 教授
	高橋 義雄	早稲田大学スポーツ科学学術院 教授
	野口 智博	日本大学 文理学部 教授
	能瀬 さやか	ハイパフォーマンススポーツセンター 国立スポーツ科学センター スポーツ医学研究部門スポーツクリニック 婦人科
	増田 和実	金沢大学 人間社会研究域人間科学系 教授
	丸山 弘道	特定非営利活動法人 日本スポーツ振興協会
	村上 晴香	立命館大学 スポーツ健康科学部 教授
	吉岡 伸輔	東京大学大学院 総合文化研究科 准教授

ガイドランナーの第一人者として 競技力向上と、伴走文化の浸透・拡大を牽引

安田 享平

ブラインドマラソン／ガイドランナー指導者

ともに走り、路面の状況や方向、さらにはレース展開等を伝えるガイドランナー（伴走者）は、視覚障害のあるランナーにとって、安全に、より速く、より楽しく走るための「目」の役割を担う。

国内外で豊富な経験をもつ安田享平氏は、その第一人者として長年にわたり、トップアスリートや指導者の育成、さらには市民ランナーへの普及・振興活動などに尽力している。

市民ランナーとして長距離走に親しみながら、1989年に千葉県代表選手として青東駅伝大会に出場。また、1991年には千葉県選手権マラソン大会にも出場し、初マラソンで初優勝を飾った。これらの活躍が認められ、勤務先の新日鐵君津製鐵所（千葉）からただ一人、当時の新日鐵八幡陸上部（福岡）に加入し、実業団選手としてニューイヤーズ駅伝にも出場している。

1996年、指導を仰いだ順天堂大学陸上部の澤木啓祐監督から指名を受け、アトランタパラリンピックのマラソン競技（視覚障害クラス）に出場する柳川春己選手のガイドランナーを務めることになった。日本盲人マラソン協会（現・日本ブラインドマラソン協会）の理事でもあった澤木監督は、「メダル獲得にはフルマラソンで2時間20分を切るガイドランナーが必要」と考えていたことから、実業団ランナーとして頭角を顕し始めていた安田氏に白羽の矢が立った。

当時は、視覚障害者に対する理解や認識もなく、「パラリンピックという大会も、どこかで聞いたことがある程度だった」（安田氏）。もちろん伴走者としての技術やノウハウは一切なく、伴走ロープ（テザー）をうまく扱えなかったことから、初めて走ったトラック競技の大会では二人で手を繋いで走っている。それでも柳川選手は5000mで日本新を記録して優勝した。

以来、勤務地の千葉と柳川選手の拠点である佐賀を往復し、トレーニングを重ねることで伴走技術と信頼を高めていった。また、競技ランナーとしての経験を背景に、勝つための技術、戦略、心構え等を積極的に伝えていった結果、わずか3か月間の急増コンビでありながら、柳川選手はアトランタパラリンピックで念願の金メダルを獲得した。さらに2000年シドニーパラリンピックでも44歳になった柳川選手を6位に導き、2004年アテネパラリンピックでは福原良英選手をガイドして4位に入賞している。

パラリンピック3大会で積み上げた豊富な経験・知見を背景に、2008年には北京パラリンピックに臨む視覚障害マラソン日本代表コーチに就任。伴走技術の体系化に取り組み、以来18年にわたって指導者として日本チームの強化を牽引し、現在は日本ブラインドマラソン協会が強化委員長を務めている。

強化委員長としてトップランナーの強化計画を策定・推進する一方、ブラインドランナーとともに走る「伴走文化」を定着させるための普及・振興活動にも積極的に取り組んでいる。市民ランナーに伴走体験の機会を提供する「ガイドランナー体験教室」を各地で開催するとともに、指導者育成を目的とした「ガイドランナー養

成者研修」等を実施。合わせて、共生社会の形成に貢献するため教育現場で講演を行うなど、パラアスリートから市民ランナー、また広く社会に向けて全方位の取り組みを展開し、伴走文化の拡大・定着に尽力している。

ブラインドマラソンに取り組み視覚障害者は、全国で広がりを見せている。そうしたランナーたちは、レース当日だけでなく、日々のトレーニングでもガイドランナーを必要とする。そうした背景の中、ガイドランナー人口も確実に拡大しており、各地域の市民マラソン大会でも、伴走ロープを手にしたランナーの姿を目にする機会が広がっている。



1996年アトランタパラリンピックで柳川春己選手が金メダルを獲得。安田享平氏（左）にとっても、この大会がガイドランナー人生の第一歩となった
©エクスタウン

受賞者のコメント

「このたびは、このような素晴らしい賞の受賞者として選考していただき、誠にありがとうございます。こうした賞をいただいたことで、あらためて“継続”という言葉の大切さを実感しています。私は幸運にもパラリンピックのような舞台を経験できましたが、全国には、一般の市民ランナーのためだけに走り続けているガイドランナーも大勢います。この賞は、そうした皆さんを代表していただいたものだと思っておりますし、誰かのために走り続けるすべてのガイドランナーの励みになってくれたら、さらに嬉しく思います」